## 文 献 紹 介

# 鈴木祥蔵著『人間の成長・発達と解放教育』（解放教育全書Ⅰ）

海 老 原　治 善

本書は、著者が近年、部落解放教育にかかわって、折にふれ論じてきた諸論文を、今回あらためて全体として再構成してできあがったものである。全体は、序章「『人間の成長・発達』と『社会的諸関係の総体』―マルクス著『経済学・哲学草稿』より―」に始まり、第一部「部落解放と教育」、第二部「部落解放教育の内容」、第三部「解放教育と就学前保育」、第四部「教育の破壊とのたたかい」、第五部「補遺＝解放教育の確立のために」という30篇からの論稿によって構成されている。

問題は多岐にわたり、幼児の言語認識の発達の問題から美育論、体育論を始め部落解放総合計画と教育と多彩な展開がなされている。したがって、これを全面的に紹介論評することは筆者の能力の限界をこえる問題を含んでいる。今は、そこで、一読して評者の興味と関心と要求にふれたそのいくつかをとりあげ、紹介というより読後感を記すことでお許しをえたいと考える。この点で筆者にはごめいわくなことになるかもしれない点をあらかじめおわびしておきたい。

第一に、筆者のそばにいる評者にとって、今この一書をよみ終えて、部落解放教育からの問いがまさに、全面的、かつ根底的、さらに如何にトータルな問いかけであるかを改めて知らされるし、これに誠実に一点も許さず取組む筆者の学問的態度に、深い敬意を表さずにはおれない。とかく専門家意識をたてに運動からの課題をさけがちなわれわれにとって、さけることなく正面からとりくまれている筆者の学問的姿勢をまた自らのものにせねばと考える。

第二に、評者の問題意識にたつとまず序論の展開に心がひかれる。近代科学の思想的根源を啓蒙主義的な個人主義とし、その教育的反映をルソー、ヘーゲルの人間の発達観のなかに指摘しつつ、また心理学にあっては、ピアジェにそれをみ、この影響が、「今日なお圧倒的な発達観」となっていると述べる(17ページ)。そして、これを思想的に克服するものとして、マルクスの『経・哲草稿』と、ワロンの考えをもとにする人間の発達観を対置している。これに評者も基本的に同感である。

ただ凝約された展開なので、初心者には抵抗があるかも知れない。倍位の分量でかいて頂けたらもっとよかったのではないかという読後感が残る。ところで、このなかでピアジェを克服する観点として、ワロンは、ピアジェが「その領域は、個人を限界とし、個人のなかに、意識の非個性的な発現をみる」点をあげている。そして彼は、意識面における矛盾を具体的に把握するためには、第一に、「その個体の精神生活の下部構造ともいうべき生理的道具」、つまり生理的成熟の役割を重視せよとする。第二として「集団思考によってあたえられた社会的道具」を指摘する。この観点を基礎に筆者の論文が展

開されていく。ところが、読みをおえて感ずることは、第二の側面（言語の発達）の論旨は一貫して深められているのに反し、第一の側面の追及が、若干手薄のように思われる。この点が、のちに、美育、言語教育は詳細な論述になってゆくのに比して、身体能力、労働の能力の発達の究明（もちろん、随所に部分的な指摘がおこなわれ、第四部第三章で「子どもの体の危機」の論文もある）が、十分おこなわれていないように読みとったのである。

第三、これとかかわって、つぎのことが浮んでくる。この序論では『経・哲』をもとに、人間の本質を感性的対象」としてでなく、「感性的活動」とするマルクスの立場を確認しつつ、さらに、能力と分業におよぶ分析は、興味深いものがある。そこから、評者は、さらに、第二点と関連するが、マルクスのいう「人間的本質諸能力」の内容と構造をもう少し筆者にききたい要求がわいてくる。

第四、教育の本質を教室における教授＝学習過程において狭くとらえようとする考えを排し「解放運動の過程そのものが大きな教育力をもつ」（35ページ）という把握から、「被形成者」から「主体的自己形成者」へというテーゼには同感できる。そのうえで、なお、相互の関係、とりわけ学校の独自的役割をどう押えるかについての見解をさらに知りたくなる。もちろん、第一部第三章「部落解放教育総合計画」で、つぎのように述べられている。「部落解放教育の進展の過程で、おそらく学校における任務と子ども会活動における任務とは、ますます明瞭にその機能を分離してゆくと同時に、かえって有機的な関係が保たれることになるであろう。学校教育の任務は、何といっても部落の子弟の基礎学力の向上である」(75～76ページ)。ここのところの具体的展開が知りたい。

第五、評者が一番大きく問題提起をうけ、教えられたのは、第三部第五章の「言語の発達と保育」のところである。とりわけ、言語の発達―聞く、話す（うたう）、よむ、かく―はどのような展開をみせるかの250～1ページの表は、この面での学習の足らない評者にはまったく勉強となった。そこで、この表を、教室の心理の方方との共同研究によってより豊かにすることができればと思った。また、言語の発達にとどまらず、すでにふれたように、身体、美、数、自治などの諸能力について、このような仮説的見通しがたつならば、科学的教育実践が可能となるだろう。今後の共同の課題として、なお筆者のさらなる問題提起をお願いして、紹介・書評を終えたい。

その第一は、平等についての理論的深めである。人間の自由についての論議は、随分されてきているが、平等についてはどうも不十分としかいいようのないのが現状である。平等というと日常的な生活感覚では、画一的、形式的、悪平等といったイメージが浮び上る。ソーブルはルフェーブルの『1789年フランス革命序説』(岩波書店）の解説のなかで、平等の問題を論及し、「法の下の平等」「享受の平等」「事実上の平等」という展開をみせている。教育における平等の思想史的問題提起をお願いしたい。

第二に、これと関連するが、差別の思想的追及である。「搾取」についてのマルクスの展開は『資本論』によって究明されたが、「差別」となると、十分とはいえない気がする。マルクスは『ユダヤ人問題を論ず』をかき、エンゲルスは『イギリス労働者階級の状態』のなかでアイルランド労働者の悲惨な状態を克明に描き出している。マルクス・エンゲルスの思想の形成における“差別”論はどうであったのか、ここらの先駆的問題提起をして頂けたらと考える。